追悼 高窪啓弥先生
東北大学の天文学教室を支えて四半世紀

竹内　峯（東北大学名誉教授）

2011年3月3日，東北大学名誉教授　高窪啓弥先生がご病気で亡くなられた．先生は，埼玉県蕨のご出身で1926年1月生まれ，85歳であった．先生は1950年東京大学を卒業された後，1952年3月まで東京天文台で大学院特研生として研究に励まれ，その年の4月に東北大学理学部講師として仙台に着任された．その後実に50年以上にわたって東北大学天文学教室をよりどころに天文学の研究教育に打ち込んでこられた．

先生が講師として仙台にこられたときは，20代半ばであって，東京大学在学中に太陽コロナについての論文をPASJに発表しておられた実績と，颯爽たる風貌とが相まって，当時の学生たちのあこがれの的であった．

当時の東北大学天文学教室では，一柳壽一教授がお元気で，恒星の大気と構造の両面で若手と協力して理論的研究を進めておられた．高窪先生の仙台での最初のお仕事は，日食時にコロナを観測するための装置の開発であった．しかし，2度にわたって観測に赴かれた皆既日食はいずれも天候に恵まれず，学術的成果は得られなかった．

その後，先生の関心は星間物質に移られ，オランダに出張された際には波長21 cmの電波の観測結果を解析し，銀河系内の中性水素分布について一連の論文を発表され，研究者としての実力を示された．

先生は，東北大学にしかるべき観測装置がないことを深く憂えておられ，さまざまな機会にその実現を図られたが，当時の天文学を取り巻く環境はそれを許さなかった．先生が，岡山の光学望遠鏡，野辺山の電波望遠鏡を利用して行った観測的研究は，観測装置の機能についての先生の詳しい理解を感じさせるものであった．

写真1　高窪啓弥先生．

1980年代後半からは，B335，NGC7538，B361などの星間天体の構造の研究に取り組まれた．それまで静穏な天体と思われていたグロビュールの中に双曲流bipolar flowが確認されたときは，それを「暗黒雲中双竜躍る」と表現して喜んでおられた．

若手との星間物理学研究の一端を，スピツァーの名著の翻訳「星間物理学」という形で公刊されたが，このことによりわが国の学界の水準向上に大きく寄与されたと思う．

先生は，1962年に教授に昇任されてから，1989年に退職されるまで，東北の天文学教室運営の柱となられ，若手の育成の面でも成果を上げ

写真2　2枚の写真は2006年に開かれた叙勲をお祝いする会のときのもので，亀谷　収氏（国立天文台水沢）と香川大学の松村雅文氏（香川大学）の撮影されたものである．

られた．また，日本天文学会の運営面でも努力され，理事長の重職も務められた．身近にいた私としては，もっとこうした先生の努力にお役に立てればよかったという反省が残っている．

先生の学風を私なりに思い出してみると，大胆な前提からモデルを展開して見せるということよりは，観測結果を細部にわたるまで吟味して自然の姿を明らかにすることに関心があったように思われる．その点では，世界一流の観測装置を使いこなせる環境でのお仕事ぶりをもっと見たかったと思っている．

先生が亡くなられて後旬日を置く間もなく，東日本大震災が起き，今に至るまで関係者で先生のご冥福を願う場を設けることができていないことは，かえすがえすも残念であるが，温厚な先生は笑顔で「いいんだ，いいんだ」と言われているような気もしている．

竹内　峯先生は，本稿初校直後の2012年2月18日にご逝去されました．謹んでご冥福をお祈り申し上げます．

天文月報編集員会